

「^た崇る王家」と
聖徳太子の謎

関裕二



たた
「崇る王家」と聖徳太子の謎

関 裕二

関 裕二—1959年、千葉県柏市に生まれる。歴史作家。仏教美術に魅了されて奈良に通いつめ、独学で古代史研究をはじめ。1991年に『聖徳太子は蘇我入鹿である』（ワニ文庫）でデビュー。以後、新たな視点から古文書を読み解き、深い洞察と大胆な推理に支えられた著作を数多く発表している。その他の著書には『古事記逆説の暗

号』（東京書籍）、『伊勢神宮の暗号』『出雲大社の暗号』（以上、講談社）、『神武東征の謎』『出雲抹殺の謎』（以上、PHP文庫）、『藤原氏の正体』『蘇我氏の正体』『物部氏の正体』（以上、新潮文庫）、『古代日本列島の謎』『古代史』謎解きのヒント』『天皇家』誕生の謎』『女性天皇』誕生の謎』（以上、講談社+α文庫）などがある。

講談社+α文庫 ^{た た お う け}「崇る王家」と^{し ょ う と く た い し}聖徳太子の^{な ど}謎

^{せ き ゆ う じ}関 裕二 ©Yuji Seki 2011

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

2011年4月20日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部(03)5395-3532

販売部(03)5395-5817

業務部(03)5395-3615

カバー写真——©SEBUN PHOTO/amanaimages

本文写真——講談社資料センター

デザイン——鈴木成一デザイン室

カバー印刷——凸版印刷株式会社

印刷——慶昌堂印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料は小社負担にてお取り替えします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

Printed in Japan ISBN978-4-06-281420-1

定価はカバーに表示してあります。



目次◎「崇^{たた}る王家」と聖徳太子の謎

はじめに 3

序章 「太子信仰」と古代史の闇

一〇〇年以上も忘れられていた聖徳太子 20

いくつもの仕掛けがあつた太子信仰 22

「古き良き飛鳥時代」への郷愁か？ 27

悲慘な時代の到来 30

古き時代を懐かしんでいた『万葉集』 33

なぜ大悪人蘇我氏の時代を懐かしんだのか 35

なぜ太子の入滅一〇〇年後に始まったのか 37

光明子と長屋王と法隆寺のつながり 40

法隆寺が必要とされた理由 43

第一章 一神教と日本人の信仰

「八百万の神」の可能性	48
神道はいつ成立したのか	51
天皇と神道との関係	53
神道は「稲作民族の信仰」なのか	58
伝承の実年代はどこまで遡れるか	62
神道と仏教が重なっていった背景	65
一神教はどのように生まれたのか	69
恨みと復讐心が一神教を生んだ？	73
津「地鎮祭違憲訴訟」の顛末	75
なぜ日本は植民地にならなかったのか	78
ガラパゴス化する日本の技術	83
琉球人の無欲に驚いた幕末の西欧人	85
絶賛された日本の景色と文化	87

日本を恥じ、捨てたのは日本人自身	92
帝国主義の論理	95
守られつづけてきた日本人のコア	98

第二章 天皇はなぜ恐れられたのか

過去を捨てた縄文人	106
ヤマト建国で平和な時代は到来したのか	108
恐れられた「錦の御旗」	110
崇りを恐れた天皇	112
「崇る王」は「崇られる王」	115
「現人神」の正体	117
崇る出雲神の謎	119
考古学が指摘する出雲の衰弱	122
死ぬに死ねない出雲国造	124
身逃神事の不可解	126

ヤマト建国と纏向遺跡 128

考古学が割り出したヤマト建国の過程 130

鍵を握る神功皇后 132

歴史から消えたトヨと出雲 135

ヤマト黎明期の主導権争い 137

吉備と出雲の相剋 138

吉備と出雲それぞれの思惑 140

ヤマトの主導権争いに巻き込まれた神功皇后 142

ヤマトの初代王は誰なのか 145

神武天皇にそっくりな応神天皇 147

神武はヤマトタケルの霊剣に救われた？ 149

「恐ろしい天皇」になった理由 151

第三章 「崇る鬼」 聖徳太子の正体

蘇我氏と出雲のつながり 156

復活した日本海勢力 158

鏡に映したような出雲神と皇祖神 161

天皇家の不思議な風習 164

聖徳太子は崇っていた？ 166

聖徳太子と童子像 168

聖徳太子の先見の明 170

太子は即位していたのか 172

問い直される飛鳥の歴史 173

『日本書紀』の描いた図式 174

でつち上げられた崇峻天皇暗殺 176

蘇我氏の「悪行」の本質 177

なぜ蘇我入鹿は崇つて出たのか 179

女帝は中継ぎか 180

女帝誕生のカラクリ 181

大化改新と難波遷都の謎 183

律令制導入に積極的だった蘇我氏 185

民衆に嫌われていた中大兄皇子 188

山背大兄王という亡霊 191

乙巳の変のカラクリ 192

太子道を行く 194

第四章 聖徳太子はいなかった

『上宮聖徳法王帝説』というヒント 198

太子信仰はどうやって広まったのか 201

排除された「蘇我」の血 203

蘇我系ゆえに連座した吉備内親王 207

天武の王家を嫌っていた藤原氏 210

なぜ天智と天武は対立したのか 212

密かに乗っ取られていた天武の王家 215

天照大神になった持統天皇 217

崇る大津皇子の恐怖 219

謎めく大海人皇子の立場 221

なぜ蘇我氏が後押ししたのか 224

長屋王と聖徳太子をつなぐ「上中下」 226

理想主義者・蘇我氏と権力欲にまみれた藤原氏 230

塩漬けにされた生首 233

差別される者たちに広がった太子信仰 236

太子信仰に隠された日本人の三つ子の魂 238

おわりに 241

天皇系図 244

●初出 246

●参考文献 248

^{たた}
「崇る王家」と聖徳太子の謎

関 裕二

講談社+α文庫

はじめに

聖徳太子しやうとくたいしの活躍した時代と、現代の日本はよく似ている。

三世紀後半のヤマト建国以来、右肩上がりの成長を継続してきた古代日本は、六世紀に至ると流動化する朝鮮半島の情勢ほんろうに翻弄され、国益を大きくそこねていたのだった。

強い同盟関係でつながっていた朝鮮半島最南端の伽耶諸国かやは、六世紀半ばに滅亡し、もうひとつの友好国・百済くだらも衰弱いちじるしく、命運が尽きようとしていた。

朝鮮半島南部が活力を失った理由のひとつには、ヤマト朝廷内の主導権争いが同盟国にも動揺を広げたことがあったが、さらに付け加えるなら、伽耶やヤマト朝廷が中央集権国家ではなかったことがあげられよう。

特に、多島海に囲まれ、通商によつて栄えた伽耶諸国は、いくつもの地域ごとに細かく独立し、国々を結びつける強い王を求めてこなかった。多島海は潮の流れが速

く、海運が発達しやすい。しかも伽耶は、朝鮮半島と日本を結ぶ航路のジャンクションに当たっていたから、商業によつて繁栄した。中世の堺さかいの商人が強く「自治」を望んだように、商人は強い権力を嫌うものである。

当時のヤマト朝廷も権力は分散していた。ゆるやかな連合体として司祭王しさい（天皇）を推戴すいたいしていた。その長所は、独裁王が現われにくいことと、平和を維持することが比較的容易だった点にある。

弱点は、非常時にも統一した意志を示せず、右往左往せざるを得ないことだろう。だから、五世紀から六世紀にかけてのヤマト朝廷の外交戦略は優柔不断で、ことごとくが失敗した。これも、現代日本に通じる。

要するに、このころの日本は疲弊ひへいし、自信をなくし、迷い、「改革」をせねば立ちゆかなくなっていたのだ。

やはり、聖徳太子の時代は現代によく似ている。

では、われわれの御先祖様は、何か行動を起こしたのであろうか。

変化がはつきりと分かる遺物が、各地に残されている。それが、前方後円墳ぜんぽうこうえんふんと都城とじょう

である。

天皇家の権威の象徴は前方後円墳だった。この時代のおおきみ大王（天皇）は司祭王的性格が強く、巨大な権力を有していたわけではない。それでも、前方後円墳という装置がうまく機能し、大王の権威を守り続けた。大王の墳墓より大きな墳丘墓が造られたためしはなかったのだ。五世紀前半に、吉備の首長が大王とほぼ同等の巨大前方後円墳を造営したことがあったが、これは例外だったし、わずかに大王のものより小さかった。

このように、前方後円墳はヤマトの秩序を保ってきた象徴なのだ。ヤマト建国によって大王（天皇）は司祭王的権威を獲得し、ヤマト朝廷の宗教観・宗教儀礼も同時に整った。日本各地で前方後円墳が採用され、それまで地域ごとにばらばらだった祭祀形態の統一がはかられたのである。

これが「神道」の始まりである。

ところが、六世紀末（五八五年）に崩御された第三〇代敏達天皇の磯長谷の陵（大阪府南河内郡太子町）を最後に、以降、前方後円墳は造営されていない。約三〇〇年続いた前方後円墳の時代は幕を閉じたのである。

長い伝統が途絶とぜつしたのだ。この時、何かが変わったのである。

巨大前方後円墳の消滅は、宗教観が覆くつがえされただけではなく、「マツリゴトまつりごと」そのものが大きく変革されたということだろう。

拙つたない外交戦略によつて国力を疲弊させていた当時の日本には、巨大古墳を造営する余力はすでになかったのだろうし、公共事業をくり返す「大きな政府」が、財政の見直しをした、ということでもあつたろう。

一方で、七世紀半ばから巨大な永久都城の建設が始まっている。難波宮なにわのみや、藤原京ふじわらきやう、平城京へいじやうきやうと、一〇〇年の間に三つの巨大な都城が建造されていった。

やはり、われわれの御先祖様は、どん底からはい上がり、新たな国家像を模索もさくしていたのである。

そして、前方後円墳が造営されなくなり、都城建設が始まるちようどその直前、聖徳太子が出現していたのだ。

この時代、誰かが政治に大蛇おおなを振るい、改革事業を展開したことは間違いない。誰が改革の中心に立っていたかといえば聖徳太子であろう。『日本書紀にほんしよき』を読む限り、聖徳太子以外にめばしい人物が見あたらないからである。

『日本書紀』によれば、聖徳太子は冠位^{かんい}十二階や十七条憲法を制定したという。これを信じれば、「聖徳太子は改革派だった」ということになる。もちろん、聖徳太子が大いに活躍したという事実があつたからだろう。

ただ、ここが奇妙なところなのだが、聖徳太子の実像はぼやけて見えるのだ。『日本書紀』は聖徳太子を必要以上に礼讃^{らいさん}するが、具体的に何をやったかというところ、本当のところはよく分かつていないのだ。

たとえば、十七条憲法の文面には、後の世の人の手が入っていると考えられている。聖徳太子によるものかどうか怪しいと考えられている。

また、通説は、聖徳太子の改革事業は蘇我^{そが}氏の邪魔^{じやま}立てによつて頓挫^{とんざ}した可能性が高いという。

何とも不思議な話ではないか。物証は「この時代、何者かが改革を成し遂^なげていた」「時代の大きな曲がり角だった」という。ならば、いったい誰が改革を実行したというのだろうか。そして、聖徳太子とは何者なのだろうか。

聖徳太子こそ、古代史の謎を解く大きな鍵なのである。『日本書紀』は何かを隠してしまった。鍵を握っているのは聖徳太子である。